

さて、このことの意味は大きいのである。実体のないところから構想を練るといおうか、ないものはないの例えどおり、具体ですでに世界に通じることを示してみせた。それに加え、現在、嶋本先生がやっていることは具体も立派なことであったが、いま嶋本先生がやっていることは、はるかに大きく未来を開くものである。具体の時でも、その兆しはあったが、「平和」というように、平和はひとりでやれるものではない。それは女であり、男であり、子供であり、親であり、祖母であり祖父である。そして、なにより人間の生きる基礎構造であり、その生きてゆく大地であり、地球であり、銀河系宇宙であるのである。その核に平和を持ってくる。その平和を芸術で展開ネットワークしようというのである。個性も含めて多くの芸術家が参加して、それぞれが花をつけ、カレイに咲き誇ることが出来るグラウンドを、すでに嶋本先生が作り上げている。その作り上げている「いる」ということを、私は日本の、世界の人々に、こうして告げるヨロコビにひたっているのである。勿論、その極く小さいけど、私もその一員に加えていただいて、歌の文句のよう、芸術の花の輪で全世界を包むとき、ウツボツとした民族国境は一挙に消滅する。しかし消滅は決してしないだろう。けどその願いを持つことは唯一、芸術に残された人間にとっての可能性への最初の道ではないか。ひとりひとりが確実に幸になる時、また世界の平和は実現してくる。この言葉は甘いかもしれない。辛い言葉に、地獄になれ親しんだ芸術家が、いまこそこの甘い大甘い言葉を芸術によって花咲かせる時、この、ココムにゆれ動く貿易摩擦を引きおこしている日本人の、日本の経済大国の出口のない侵略に、何処かで迷っている現在の日本の混迷、苦悩を、一挙に解決するソフトウェアであるに違いない。一見、それは、なんの役にも立たないものと見えても、事実、前衛作家の作品は、長い間、なんの役にも立ちしなかった。前衛を職業として生活することはできなかった。その哲学、詩では生活できないのと同様であった。それは、物質文明が遅れているというだけで人間の上下の差があるかと言えば、それはむずかしい質問であるが、決して未だに回答は出ていない。だがしかし、靴のいらぬアフリカ人の人々に靴を無料で配るということはどんなことを意味するのであろうか。善意の教授の靴が最初は無料でも、次は有料となるのである。産業がないところ、そのパナナを食べて生活できて行けるところで何故金が必要となるのか。それは次の靴を買う必要に迫られるからだ。また国家が出来、それを植民地政策の結集としての貿易、税関と必要としないものをおしつけて義務だと言って、パナナを食べていたら、永遠に大きな争いもなく生活してゆけたのに近代兵器とゼット機を使用しての部族間戦争が、いまアフリカでは頻発している。そして、未だに少数の白人が乗り込んできて、そこに昔から住んでいた多数の人々をおさえこみ、投票、権利も与えず酷使しているという。文明、産業とはいったい何ものであろうか。いま、日本の悲劇は、子供が大学を卒業して一人前になる23歳までに、塾に通い、家庭教師についてゆくと、家一軒分、勿論東京での話ではない。いわゆる2,000万円の金がかかり、それでもやっと自分自身が食べるだけがセキの山である。